

アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国

名古屋市美術館 2017.03.07~04.16、東京ステーションギャラリー04.29~06.18



「アドルフ・ヴェルフリ」(1864~1930)は、20代の時に総合失調症のため精神病院に収容され、治療のために紙と鉛筆を与えられて描き始めたため、創作化が開花してそこで没するまでの35年間を過ごした。

画伯は空想的な自叙伝を書き始め、色鉛筆によって緻密な絵や楽譜を付して書物にした「**2萬5千頁**」におよぶ膨大な作品を残したユニークな画家である。

画伯は、「アール・ブリュット」(アウトサイダー・アート)の巨匠として半ば伝説化しているが、名ばかりで彼の作品を実際に目にする機会は全くなかった。

この「アウトサイダー・アート」は、“特に芸術の伝統的な訓練を受けることなく、名声を目指すでもなく、規制の芸術の流派や傾向・モードに一切とらわれない**自然の作品・生の芸術のこと**”を意味している。

展示作品は、カラフルに塗り分けられた楽しげな**絵と文章**が、左右対称の枠組みの中に記号や人物のような形の文字や楽譜がびっしり書き込まれている。

これらは全て彼の独創によるもので、隙間なく埋め尽くす空間恐怖の典型であり、宇宙観を表す「曼荼羅」にもたとえられてきたものである。

《ネゲルハル (黒人の響き)》(1911年)



アドルフ・ヴェルフリ「ネゲルハル (黒人の響き)」(1911年、ベルン美術館アドルフ・ヴェルフリ財団蔵) ©Adolf Wölfli Foundation, Museum of Fine Arts Bern

作品は、異国の風景の中を自身の分身と思われる人物が自由に飛び回り、鳥のような形の生き物が寄り添っているが、実人生は「旅」とは全く無縁であったようだ。

画伯の『初期の作品』は、新聞紙に鉛筆で描かれた単色は「楽譜」と呼び、「300点程度」が現存する。

『揺りかごから墓場まで』は、幼い自分が家族と共に世界を巡る「旅行記」で、全9冊、2,970頁におよぶ抒情詩に**752点の絵画**からなる旅行記である。

画伯のこれらの作品からは、造形的な力強さや華麗な装飾性だけでなく、**膨大なエネルギーと恐るべき執念**が感じられ、**息をのむほどのすごみ**が感じられるのが特徴である。

参考書籍:「画伯の作品集」が服部正監修により図書刊行会より発刊(2017)されている。